世界に誇る二本脚の騎馬像

最上義光公:山形

加 藤 良 一　2015年12月5日(追記2024年8月25日)

歌人斎藤茂吉の歌に蔵王山を題材にしたつぎのようなものがあります。

陸奥(みちのく)をふたわけざまに聳(そび)えたまふ蔵王の山の雲の中に立つ

この歌は、結句の「雲の中に立つ」のは、果たして蔵王山かそれとも作者自身かと意見が分かれ、難解な歌とされているようです。しかし、それは専門家にお任せし、とりあえず蔵王山の麓に広がる山形市に目を移します。

山形市の歴史は古墳時代にまで遡るようです。延文元年(1356)、斯波兼頼(しばかねより)が羽州探題として山形に入部。子孫が地域の名をとって最上氏を名乗るようになり、11代目当主の最上義光(もがみよしあき)が山形を拠点に最上、村山地方を統一、現在の基礎となる山形城と城下町の町割を整備しました。廃藩置県後は、村山郡山形が山形県の県庁所在地となり、その後、複数の県の統合を経て、現在の山形市が県庁所在地となりました。

最上義光が築城を手掛けた山形城は、別名霞城(かすみじょう)あるいは霞ヶ城(かすみがじょう)と呼ばれていました。その城跡は現在霞城(かじょう)公園として整備され、中心に最上義光の騎馬像が建っています。

この騎馬像は、上杉景勝(うえすぎかげかつ)の重臣直江山城守が攻めてきた際、義光自らが陣頭指揮をとっている勇姿を再現したものということですが、じつは世界的にみても珍しい「完全に二本脚で立っている」像なのです。重さは3トンもありますが、先の東日本大地震を受けてもビクともしませんでした。多くの像は、二本の前脚を高く上げてはいても、後ろ脚の傍に大きな岩を配置してそこで重量を分散させたり、あるいは尻尾を地面につけて支えたりと、とにかく二点ではなく三点以上で支えているのです。

この像は、山形に本社がある株式会社でん六の創業者、故鈴木傳六（でんろく）さんが寄贈したもので、躍動感を出すため、とにかく「二本脚で立つ」ことに情熱を傾けたそうです。さらに勇壮さを表現するために「時代考証に捉われない鎧兜姿」を求めました。

このあたりの発想は、歴史研究者などから反感を買う恐れもあったことでしょうが、造るからにはインパクトがあり、郷土の人びとに愛でられるものにしたいという思いが勝っていました。

山形新聞　第33645号

重さ3トン支える2本足

ブロンズ製作に新境地

山形鋳物

霞城公園の最上義光像

世界で初の試み

大地震も大丈夫

ヤジロベエの原理応用

2本足だけで宮城県沖地震にも倒れなかった義光像

果たして3トンもある大きな銅像がたったの二点で支えられるのでしょうか。強度計算をした設計事務所の結論は「無理」というものでした。しかし、諦めきれない傳六さんは、山形市内の鋳物工場になんとか造れないかと依頼しました。二本脚の騎馬像は国内には前例がなくほとんど無理といわれても、外国に目をやれば数は少ないものの実例があるのだから出来ないはずはない、と最後まで押し通したそうです。その熱い思いに共感した職人たちが発奮し、独自の構造計算により、鉄骨の選択や支柱の折り曲げ角度などさまざまな課題を克服して完成に至ったのです。

その時の取り組み状況が、昭和53年（1978）11月17日付けの山形新聞に「重さ3トン支える2本足」として紹介されました。

たとえば、ウィーンのホフブルク宮殿前の英雄広場に立つ、カール大公の騎馬像（写真左上）は前脚を振り上げ、尻尾も宙に浮いています。まさに二本の後ろ脚だけでその重量を支えているのです。造られた当時、勇ましくてかっこはよいが、相当不安定ではないかとの噂が立ったそうです。

そんなことから制作者は、騎馬像が突然崩れ落ちるという悪夢に悩まされ続け、とうとう精神に異常をきたしてしまい、その後、精神病院で亡くなったといいます。この彫刻家はじつに哀れな生涯を過ごしたものです。そんな心配をよそに、カール大公の騎馬像は今でも立派に立ち続けているのです。

ロシアのサンクトペテルブルクにあるピョートル大帝の騎馬像『青銅の騎士』（写真左下）は、後ろ脚二本と尻尾の三点で支えています。

最上義光の騎馬像は、このように日本を代表するほどの銅像なのですが、思いのほか県民のみなさんはそのことを知らないというのです。まさに灯台もと暗しですね。そんなことですから県外の人が知るよしもありません。

戦国一の「邪悪者」の汚名を返上

余談ですが、「伊達政宗」の伯父に当たる「最上義光」とその妹で政宗の実母でもある「義姫」が、政宗毒殺を試みたとして、戦国一の「邪悪者」として伊達家の記録には残されていました。しかし、最近の調査で見つかった新しい史料により毒殺未遂は史実ではなかったことが明らかになったのです。このあたりの事情を2016年11月放映のNHK「歴史秘話ヒストリア」が分かりやすく紹介していました。長年にわたって着せられていた義光の汚名はこれでようやく拭われることになりました。実際には、むしろ時の権力者から翻弄されながらも、兄義光の武勇と妹義姫の機転で故郷山形を守り抜く姿が浮き彫りにされてきたのです。

ブラタモリ 「最上義光像の正面は横から見た方ではないか？」

2023年7月22日NHK総合で放送された「ブラタモリ」のテーマは「山形～山形は何度も生まれ変わる？～」でした。県内のさまざまな見どころを紹介しながら、歴史をひもといてゆくものです。

山形市内北側にある「文翔館（ぶんしょうかん）」※は、明治時代につくられた建物でもとは県庁として使われていました。初代県令の「三島通庸（みちつね）」は古い武士の社会にとらわれない新しい山形を目指し、三ノ丸の堀の外側に県庁を建てたといわれています。また、三島は山形を代表する果物サクランボをいち早く日本で栽培できるようにしました。

番組の最後に出てきたのが「最上義光」の騎馬像でした。取材で山形のイメージが大きく変わったというタモリさんでしたが、銅像を見上げながら「最上の銅像は方向がちがう」のではないかとひと言漏らしました。

銅像の正面は騎馬が向いている方向（写真右）になっています。これを下から見上げると豪快さが感じられないとタモリさんは感じたのでしょう。

確かに正面からでは馬の嘶（いなな）きも聞こえてこない気がするし、迫力がいま一つ伝わってこないかと思います。

さて、銅像の最上義光公が右手に掲げる指揮棒の向かう先は、宿敵、米沢藩の直江兼続（なおえかねつぐ）が陣取った西の方角を指しているといいます。慶長5年（1600）、天下分け目の戦いである関ヶ原の戦いで義光は東軍へ加担し、「北の関ヶ原」と呼ばれた慶長出羽合戦（けいちょうでわ）へと突入します。豊臣政権の五大老であり、西軍の有力大名であった、上杉景勝（うえすぎかげかつ）は、重臣である直江兼続（なおえかねつぐ）に2万5千の軍勢を預け山形へと攻め入り、支城の長谷堂城（はせどうじょう）へと猛攻を仕掛けました。全力で守る義光との一進一退の争いは半月にも及びましたが、関ヶ原での東軍徳川方の勝利を知らされた直江兼続は退却します。その後、義光は家康から57万石の領地を認められ、実質の石高が百万石とも言われる領国を築きます。

まあ、タモリさんの疑問もわかりますが、このような時代背景を考えると一理あります。いっそのこと右側面にも銘板を嵌めて二正面にしてもよいのではないかと思います。

※文翔館の壁に使われた煉瓦は、明治20年（1887）に設立された日本煉瓦製造株式会社（埼玉県深谷市）で作られたものです。日本煉瓦製造は日本で最初の機械式煉瓦工場で、2024年に1万円の肖像に採用された**渋沢栄一**らにより設立され、東京駅をはじめとする多くの近代建築物がここで生産された煉瓦を使って造られました。現在は、日本の近代化に大きく貢献した煉瓦工場の一部が国指定重要文化財として保存されています。

鈴木傳六さんは、ほかにも山寺の「芭蕉像」、羽黒山出羽三山神社の「芭蕉像」、千歳山公園の「安全地蔵尊」、山形県営体育館のレリーフ「天翔ける」、黒沢温泉「やすらぎ観音」、北海道別海町の「北方四島返還　叫びの像」などなど、山形市内を中心に数多くの銅像群を寄贈しています。傳六さんが私財を投げ打って情熱を注いだ銅像は、今では観光名所として訪れる人々を楽しませてくれています。山形の人はもっと誇りに思ってよいのではありませんか。

株式会社でん六創業者　故・鈴木傳六さん